坂戸市民の余暇活動調査

須　斉　英　樹

1. はじめに
2. 調査地区について
3. フェィス・シートの集計表から
4. 余暇活動の分類について
5. 平日の余暇活動
6. 休日の余暇活動

1. はじめに

ここ数年来連休毎に，行楽に出掛ける人々のために，高速道路の渋滞や長距離列車の混雑ぶりは大変なものである。この夏の北アルプスの槍ケ岳や穂高岳では，登山道であるにもかかわらず交通整理が行なわれた。それを報道する新聞やテレビのニュースを見ていると，マス・レジャー・ブームの到来を感じさせられる。他方，われわれのまわりで生活している人々から聞かれる声は，まだまだ家計の苦しみや自由な時間の不足を訴えるものが多いように思われる。このような時に，実際に人々は余暇をどのように過ごしているのだろうか。また，マス・レジャーの普及にともない，人々のレジャー観や職業観に変化が生じていないのだろうか。欧米においては，産業化の原動力となったプロテスタントの倫理はすでに崩壊したと伝えられている。働き過ぎを世界の先進諸国から非難されている，現代日本人の勤労者意識に変化が生じていないのだろうか。これらの疑問に答えるために調査の必要を痛感しながらも，それを実施する機会はなかなか得られなかった。

横内靖典氏に話したのが切っ掛けとなって，共同研究として坂戸市民の余暇活動について実態調査を行なうことになった。今年の3月以後，ほとんど毎週

のように集まって，調査報告の収集や検討，われわれが行なおうとする調査計画の立案，調査項目の決定に多くの時間が費やされた。ようやく6月にプリテストの実施。7月22日に調査票の配布を開始。回答者のもとに1週間調査票を留め置いた後に，8月1日に回収を終了した。例年になく暑い日が続く中で，調査票の作成，配布，回収を手伝ってくれた学生諸君（経営学科4年萩原常男，岩沢久夫，経済学科4年青木正，経営学科3年名取明彦）どうもありがとう。また多忙な時にもかかわらず，調査にご協力下さった回答者の皆様に心より感謝致します。

ここでは，調査過程の概要，調査対象となった地区および人々についての簡単な説明，余暇利用における類型別集計結果の報告がなされる。職業観についての報告は次の機会に譲ることにしたい。

2. 調査地区について

当初の調査計画では，坂戸市全域からアトランダムに5パーセントの標本を抽出する予定であったが，研究資金の都合上残念ながら調査規模を縮小せざるを得なくなった。規模の縮小に伴ない，標本の抽出方法も次のように変更された。坂戸市を代表すると思われる4つのタイプのそれぞれ2つずつ，計8地区を定めた。一地区から20歳以上の人250人を選出した。標本合計は2,000である。

『さかど市政だより』[1] から最近の坂戸市における人口の急増ぶりを紹介しよう。「昭和29年7月1日に，坂戸町，三芳野村，勝呂村，入西村，大家村が合併し新生坂戸町となりました。合併当時は人口約24,000余りの農業を中心とした昔ながらの町でしたが，首都圏45キロメートルという地理的条件から，埼玉県西部の開発拠点として位置づけられ，住宅公団の団地造成及び民間団地の進出を契機に人口が急増し，……昭和50年の国勢調査では人口50,000を超え昭和51年9月1日に坂戸市となり，昭和55年の国勢調査では77,334人となりました。」

調査対象として選ばれたのは，旧くから存続している4つの旧地区と，坂戸

市の人口急増期，この10年足らずの間に造成された4つの新地区である。

(1) 本町・仲町　通称「きどうち」[2]と称される旧宿場町の両側歩道付き街路に面した地域が調査の対象とされた。「きどうち」で営業する店舗の現地における創業年代は藩政時代に属するものが比較的多い。宿場町起源に基づく「きどうち」では，在来性に伴う転換ないし世代交替的な傾向の強さが自己増殖的にあらわれ，他の地域からの進出や，都市化に伴う副業的な営業，あるいは農業からの直接的な転換が，きわめて少ないのである。

(2) 日の出町　上記「きどうち」と東武東上線坂戸駅の間に位置する。この地域で営業する店舗の現地における創業年代は，明治以降に属するものが比較的多い。地方銀行の雄とされるS銀行坂戸支店は1900年以来「きどうち」にあったが1972年に駅前へ進出した。他に数社の銀行や大型スーパー・チェーンの進出が見られる。また「きどうち」との比較において，飲食店の多いのが目につく。

(3) 森戸　調査の対象となったのは，東武越生線西大家駅前から大家小学校までの道路の両側に並ぶ村落である。地域の住民を顧客とする数軒の商店を除くと旧農家である。旧農家であるにもかかわらず，一見旧宿場町を思わせるほど，家並はかなり密集して建てられている。

(4) 多和目　ほとんどが旧農家である。森戸との主な相違は，駅からかなり離れた村落であること（東武越生線の川角駅まで，最も駅に近い家で徒歩で約15分ほどかかる），そしてこの地域の家々は比較的間隔をあけて建てられていること。旧多和目の中に，現在の城西大学や城西歯科大学，西坂戸団地は位置している。以上4つの地区は旧坂戸を代表するものとしてとりあげた。

(5) 西坂戸　この地区は10年近く前にK建設によって造成された大規模な団地である。今回調査の対象となったのは，城西歯科大学に沿って団地の中心に位置するショッピング・センターに至る道路の両側である。ショッピング・センターの商店に隣接して，O信用金庫，市西坂戸出張所，農協西坂戸支所，郵便局，消防署などが存在する。最寄りの駅は東武越生線の川角駅であり，駅までの所要時間は多和目とほとんど同じである。

(6) 柳町　主要地方道熊谷・入間線と若葉台工業団地の間に位置し，市役所など官公施設には比較的近い住宅団地である。西坂戸団地と相前後して造成されたが，ショッピング・センターなどは存在しない。東武東上線の坂戸駅，北坂戸駅，若葉駅から等距離に位置するが，どの駅に出るにも徒歩で15～20分ほど必要とする。

(7) 溝端町　今回調査の対象となったのは，10年近く前に日本住宅公団によって建てられた高層住宅である。この住宅は北坂戸駅前ロータリーに面し，1階には商店が並んでいる。近くにはスーパ・ーチェンや商店の他に，S銀行，市北坂戸出張所，郵便局，交番所も存在する。

(8) 千代田　調査の対象となったのは2年近く前に日本住宅公団によって建てられた高層賃貸住宅である。この住宅は若葉駅前ロータリーと主要地方道毛呂山・川越線を隔てて位置し，1階は商店によって占められている。溝端町と千代田との主な違いは，建設時期と，賃貸か買い取りかである。言うまでもなく，これら後半の4地区とその近辺は新坂戸として，坂戸市における人口急増の主な源泉地域である。

3. フェイス・シートの集計表から

一般にフェイス・シートは調査項目とのクロス集計などに利用されるのだが，ここではそれぞれの地区に住む人々の理解のために用いられる。この調査は回答者に対して何ら強制力を有しない者により，全く回答者の自主性に依存する方法で実施された。回答提出者は余暇利用に関心を持つ人か，社会調査などに協力的な人か，あるいは両方を兼ねる人であると思われる。したがって，回答率の高さはある程度余暇利用に対する関心の高さを示すものということができる。地区別，男女別による回答者の分布をあらわした表1から次のことが理解される。

森戸地区と溝端町地区の回答率が高い。それぞれの男女の比較では，前者は男子，後者は女子が高い。逆に，回答率が低いのは本町・仲町地区であり，特に同地区の女子は極端に低い。次に，柳町地区が低い。これらの回答率の低い

表1　地区別の男女回答者数

	本町・仲町	日の出町	森　戸	柳　町	溝端町	千代田	多和目西坂戸	計
男　子	22	33	47	20	35	27	57	241
女　子	11	30	38	24	38	30	48	219
計	33	63	85	44	73	57	105	460

1)　地区あたり250の標本から得られた回答者実数を記した。
2)　多和目と西坂戸地区は回収時に混入し，判別不可能であったため，両地区の合計を記した。

両地区が文化会館，図書館，総合運動公園などに比較的近いことを考慮すると，余暇利用における諸施設の効果は，フレデリック・ハーズバーグの「衛生要因」[3]の役割しか果さないことになる。

回答者と坂戸市の人口構成を年齢別，男女別にあらわしたのが表2である。これを見ると，回答者の年齢別分布と坂戸市のそれが大変似通ったものであることがわかる。このことは，偶然にも，回答者が坂戸市の人口を年齢という点でよく代表していることを示している。両者が似通っていることの最も重要な意味は次のことである。一般にしばしば予想されるように，年を取るにつれて人々の余暇利用に対する関心は薄れるものであると主張すべき根拠は存在しな

表2　回答者および坂戸市人口における年齢別分布

		20～24歳	25～29歳	30～34歳	35～39歳	40～44歳	45～49歳	50～54歳	55～59歳	60歳以上	計
回答者	男　子	16	30	47	43	42	19	19	9	16	241
	女　子	17	25	53	49	36	16	11	7	5	219
	計	33	55	100	92	78	35	30	16	21	460
	%	7.2	12.0	21.7	20.0	17.0	7.6	6.5	3.5	4.6	100
坂戸市	男　子	2,062	2,866	5,025	4,395	3,505	2,300	1,508	1,030	2,385	25,076
	女　子	1,905	3,245	5,334	3,946	2,661	1,783	1,373	1,209	3,348	24,804
	計	3,967	6,111	10,359	8,341	6,166	4,083	2,881	2,239	5,733	49,880
	%	8.0	12.3	20.8	16.7	12.4	8.2	5.8	4.5	11.5	100

1)　回答者は昭和56年8月1日における年齢，坂戸市に関しては昭和56年7月1日における年齢による[4]。
2)　パーセンテージは小数点第2位以下を4捨5入した。

いということである。さらに細かい点に目を向けると，30歳から44歳の間において回答者の比率が坂戸市のそれを上回っていることがわかる。この原因は，主にその年代の女子の回答率が高いことにある。反面，55歳以上の女子の回答率の低さが目立つ。

地区毎の世帯構成をあらわしたのが表3である。柳町，溝端町，千代田，すなわち新坂戸地区では，174人中147人(84.5%)が夫婦＋子供の二世代家族である。他方，本町・仲町，日の出町，森戸，すなわち旧坂戸地区では，夫婦＋祖父母＋子供の三世代家族が最も多く，次に二世代家族が多い。両者の差は78人対70人とわずかしかなく，両者を合わせると181人中148人(81.8%)になる。なお，多和目と西坂戸地区において，二世代家族は70人であり，三世代家族は10人である。このことと多和目が旧坂戸に属し，西坂戸が新坂戸に属すということを考慮すると，多和目と西坂戸地区の回答者の大部分が西坂戸の住民であると判断することができる。

表3　地区別の世帯構成

	本町・仲町	日の出町	森戸	柳町	溝端町	千代田	多和目西坂戸	計
単身	1	9	2	2	3	1	6	24
夫婦	0	5	4	1	12	4	15	41
夫婦と子供	13	21	36	41	56	50	70	287
夫婦と祖父母	2	2	4	0	0	0	1	9
夫婦と祖父母と子供	16	24	38	0	0	2	10	90
その他	1	3	1	0	2	0	3	9
計	33	63	85	44	73	57	105	460

表4は地区別，男女別に職業分布をあらわしている。本町・仲町地区では農業以外の自営業が多く，特に男子では大半を占める。そのほとんどは小売商を営むものと思われる。女子の半数は小売商の手伝い，残りの半数は家事と答えた。日の出町地区では農業以外の自営業が最も多く，それとわずかの差で商業従事者が続いている。他の地区との比較において，家事と答えた女子が極端に少ない(30人中わずか3人)。この地区では男女の職業分布における差が小さい。

森戸地区では家事と答えた女子の数が最も多い（38人中20人）。次に多いのは，農業以外の自営業（16人），工業従事者（12人），農業（11人），商業従事者（10人）が続く。農業の11人という数は，外見的には農業地域と思われる地区においても，農業に携わる人がいかに少数であるかを物語っている。柳町地区では家事と答えた女子が最も多い（24人中15人）。次に，工業従事者（10人），公務員・教職員（6人）と続く。この地区で目につく特徴は，公務員・教職員の数である。溝端地区では，家事と答えた女子が圧倒的な多数を占める（38人中32人）。次に，工業従事者が多い（14人）。男子の職業は工業従事者に集中している。千代田地区でも，家事と答えた女子が最も多い（30人中21人）。次に，商業従事者（9人），工業従事者（6人）と続く。最近転居して来た人々から成るこの地区では，日本の職業構造における変化を反映して，商業従事者の数が工業従事者のそれに増さっている。ほとんど西坂戸に住む人々から成ると先に判断された，多和目と西坂戸地区においては，家事と答えた女子が最も多い（48人中29人）。次に，農業以外の自営業（24人），公務員・教職員（11人），工業従事者（10人），商業従事者（9人）と続いている。この地区で目につく特徴は，柳町と同様に，公務員・教職員の11人である。なお農業と答えた人がたった1人しか存在しなかったことと，多和目地区は森戸地区以上に旧農家が占める比率が高いということは，この地区の回答者のほとんどが西坂戸の住民であるという先ほどの判断が正しいことを裏付けている。

以上職業に関する分析は次のように要約できる。(1)一般に女子の職場への進出が話題とされているが，今回の調査によれば，坂戸市では家事を専業とする主婦が圧倒的な多数を占める。その主な例外は，商業地域において家業を手伝う主婦の存在である。(2)農業地域においても，農業を専業とする人は非常に少数しか存在しない。(3)最近の坂戸市への転入者は，日本の職業構造における変化を反映して，商業従事者が工業従事者よりも多いものと思われる。この点については，最近新しく造成された団地における調査を必要とする。

この調査では，主に2つの理由から，勤務時間ではなくて，通勤時間をたずねることにした。人口の都市部への集中，それに端を発する地価の高騰および

表4 地区別の職業構成

		農業	農業以外の自営業	工業従事者	商業事従者	公務員と教職員	家事	その他	無回答
本町・仲町	男	1	13	2	2	1	0	3	0
	女	0	5	0	0	0	5	1	0
	計	1	18	2	2	1	5	4	0
日の出町	男	0	16	0	13	2	0	1	1
	女	0	11	0	8	0	3	8	0
	計	0	27	0	21	2	3	9	1
森戸	男	8	11	11	5	2	0	8	2
	女	3	5	1	5	1	20	3	0
	計	11	16	12	10	3	20	11	2
柳町	男	0	2	8	0	6	0	4	0
	女	0	1	2	2	0	15	4	0
	計	0	3	10	2	6	15	8	0
溝端町	男	0	1	13	4	0	0	14	3
	女	0	1	1	0	0	32	4	0
	計	0	2	14	4	0	32	18	3
千代田	男	0	3	6	7	1	1	9	0
	女	0	1	0	2	1	21	5	0
	計	0	4	6	9	2	22	14	0
多和目 西坂戸	男	1	15	10	7	10	0	14	0
	女	0	9	0	2	1	29	4	3
	計	1	24	10	9	11	29	18	3
計	男	10	61	50	38	22	1	53	6
	女	3	33	4	19	3	125	29	3
	計	13	94	54	57	25	126	82	9

1) 農業以外の自営業と，工業従事者および商業従事者という選択肢間の区分がはっきりしないことが原因で，自営であるにもかかわらず，誤って工業や商業従事者という選択肢を選んだ回答が発見された。これらはエディティングの際に，世帯構成や通勤時間の欄を参照して訂正された。

住宅難などから，遠距離からかなり長い時間をかけて職場に通わざるをえない人々が増加していること。もう1つは，日本の高度経済成長によって生じた人手不足や労働移動の増加に対処するべく労働条件が改善され，賃金や勤務時間

における企業間の格差は一般に縮小されつつあると思われること。表5は地区別の片道の通勤に必要とされる時間を30分刻にあらわしたものである。合計欄を見ると，自宅と答えた人が半数以上存在することがわかる。それらは家事に携わる主婦と，主に旧地区で自営業を営む人から成っている。そして通勤所用時間が長くなるにつれて回答者の数は減少している。地区の比較では，本町・仲町，日の出町，森戸という旧坂戸地区の人々は比較的近くの職場に通ってい

表5　地区別の通勤所用時間

		自宅	30分以内	31～60分	61～90分	91～120分	121分以上	無回答
本町・仲町	男	13	7	1	0	1	0	0
	女	10	0	0	1	0	0	0
	計	23	7	1	1	1	0	0
日の出町	男	16	13	3	0	1	0	0
	女	17	13	0	0	0	0	0
	計	33	26	3	0	1	0	0
森戸	男	18	11	10	2	4	1	1
	女	29	17	2	0	0	0	0
	計	47	18	12	2	4	1	1
柳町	男	2	1	3	9	5	0	0
	女	16	7	1	0	0	0	0
	計	18	8	4	9	5	0	0
溝端町	男	0	5	14	9	6	1	0
	女	33	2	0	0	2	0	1
	計	33	7	14	9	8	1	1
千代田	男	4	7	3	13	0	0	0
	女	22	5	0	2	0	0	1
	計	26	12	3	15	0	0	1
多和目 西坂戸	男	15	11	12	10	5	4	0
	女	40	3	1	2	1	0	1
	計	55	14	13	12	6	4	1
計	男	68	55	46	43	22	6	1
	女	167	37	4	5	3	0	3
	計	235	92	50	48	25	6	4

る。他方，柳町，溝端町，千代田，西坂戸という新坂戸地区では比較的長い通勤時間の人が多く，西坂戸地区には2時間以上かけて職場に通う人が4人存在する。

表6は自動車の有無をあらわしている。概して，旧坂戸地区のほうが，新坂戸地区よりも自動車の所有比率が高い。新坂戸地区の中では，駅に近い溝端町と千代田地区が自動車の所有比率が低く，特に溝端町は自動車を所有しない回答者が所有する回答者より増さっている唯一の地区である。

表6　自動車の有無

	本町・仲町	日の出町	森　戸	柳　町	溝端町	千代田	多和目西坂戸	計
有	33	51	75	32	33	35	72	331
無	0	10	9	11	40	21	31	122

1)　他に無回答が7人あった。

4.　余暇活動の分類について

余暇の過ごし方が大変多様なことが現代人の一つの特徴となっている。このように種々雑多な余暇活動に対して十分適切な選択肢を揃えることは不可能に近い。一定の分類カテゴリーを示して回答者に選択を求めても，それが一般に理解されているものでない限り，適切な選択を期待するわけにはいかない。そして余暇活動の分類には，職業のごとき参照できる標準分類が存在しないのが現状である。それゆえ，この調査では回答者に余暇の過ごし方を自由に記述するように求め，以下に示されるような分類カテゴリーに基づいてアフター・コーディングがおこなわれた。コーディングは横内靖典氏と小生の2人だけがあたり，作業は常に一緒の場で進められ，判別しにくいものは両者の話し合いによって決められた。

ここで用いられたのは尾高邦雄によって提示された4つのカテゴリー[5]である。その要点のみ引用することにしよう。その第一は，あすの仕事にそなえておこなわれる休息や気晴らしとしてのレジャーである。このカテゴリーには

「ゴロ寝」とか「家でブラブラしている」とか表現される無為の状態から，夕飯後の一家団欒，新聞や雑誌を読みながらの休息，簡単な室内遊戯などまでがふくまれる。この種のものを「休むレジャー」と呼んでいる。

第二のカテゴリーは，「見るレジャー」ともいうべき種類の活動であって，屋内でおこなわれるものが多い。テレビを見たり，ラジオを聞いたり，映画を見たり，音楽を聞いたり，読書をしたり，野球見物をしたりするのが，それである。「見るレジャー」の特色は，その活動が受動的であり，つねに観客や聴衆の立場に立っておこなわれる点にある。

これにたいして第三のカテゴリーは，みずから演技し，実行するタイプのレジャー活動で，このほうは屋外でおこなわれるものが多い。この種のものは，かりに「するレジャー」と呼んでおこう。登山，観光旅行，ハイキング，ドライブ，スキー，ゴルフ，テニス，釣りなどは，その代表的なものであり，また写真に凝るとか，動物を飼うとか，園芸に精出すとかいうような，いわゆる趣味も，この部類に属する。これと並らんで，「するレジャー」に属するいま一つのタイプは，いわゆる稽古事である。しばしばかなりの苦痛をともない辛抱強さを要求するこのタイプのレジャー活動には，ピアノ，生花，洋裁などの，普通の稽古事はもとより，友人たちが集まって定期的におこなう趣味兼勉強としての読書会や研究会などもふくまれる。

最後に，これらのいずれともやや異なる第四のカテゴリーとして，友人の家庭を訪問するとか，教会にいくとか，いろいろの団体の仕事をするとか，慈善事業に関係するとか，あるいは日曜大工をやって家族にサービスするとかいうような活動があげられる。職業上のサービスのように，物的な報酬を結果として予想するものではないという点では，これらの活動も，広義のレジャー活動の一部に数えられてよいだろう。ここではこれを，言葉は少しおかしいが，「働くレジャー」と呼んでおく。

同じ箇所で，尾高邦雄は次のように述べている。「このように，余暇活動には，すくなくとも4つのタイプが区別されるが，他面ではもとより，これらの4種類を通じての共通点もあるわけである。これらの活動が(1)多かれ少なかれ

自己目的であること，(2)拘束され，あるいは強制されたものではなくて，自分の好きでやるものであること，(3)物的な報酬を結果として予想するものではないこと，などがそれである。

以上から，レジャー活動が，たんなる有閑性や，無為徒食や，享楽本位の時間すごしや，真剣さを欠いた遊戯的な行動などに帰着させられないことは明らかだろう。たしかに，レジャーは，本人が自分の好きですること，かれ自身の楽しみになることでなければならない。だが，それはこの概念の一面であって，他面では同時に，それは本人の健康の増進，教養の向上，また人間的な成長に役立つ活動であり，さらにそれ自身が対社会的なサービスともなりうるものである。いいかえれば，仕事や労働の概念に2つの側面が区別されると同様，レジャーの概念にも，以上に見たような二つの側面が区別されうるのである。」

5. 平日の余暇活動

自由時間の長さにおける違いから，異なることが当然予想される平日と休日は別個の項目として，同一の質問を繰り返した。アフター・コーディングの際に，「買い物」や「ドライブで買物に出かける」という回答をどのカテゴリー分類に入れるべきかが問題になった。そのような回答が平日よりも休日に多いことからも推察されるように，その内容はウインドー・ショッピングやドライブがてらの買物であり，それらが第三のカテゴリーである「するレジャー」に属するものか，それとも第四の「働くレジャー」に属すものか判然としない。結局，それらは別のカテゴリーとして表すことにした。それぞれのカテゴリーの実数は表7に示されるとおりである。

他の調査結果と同様に，合計で最も多数を占めたのは「見るレジャー」であった（129名）。次に，「休むレジャー」（109名），「するレジャー」（73名）が続いている。これを男女別に見ると，男子では「見るレジャー」（74名）と「休むレジャー」（72名）が圧倒的多数を占める。他方，女子では「見るレジャー」（55名），「するレジャー」（47名），「休むレジャー」（37名），「働くレジャー」（28名）となり，それぞれの差はあまり大きなものではない。

地区別の比較においても，男子に認められた「見るレジャー」や「休むレジャー」が多いという傾向は各地区に共通している。しかし女子の場合には，旧坂戸地区と新坂戸地区の間にはっきりと差が生じている。本町・仲町，日の出町，森戸という旧坂戸地区の女子では，男子と同様に，「見るレジャー」や「休むレジャー」が多い。他方，柳町，溝端町，千代田，西坂戸という新坂戸地区の女子では，「するレジャー」や「見るレジャー」が多数を占め，「休むレジャ

表7 平日の余暇活動

		休むレジャー	見るレジャー	するレジャー	買物レジャー	働くレジャー	無回答
本町・仲町	男	8	9	0	0	1	4
	女	3	4	1	0	2	1
	計	11	13	1	0	3	5
日の出町	男	14	7	4	0	2	6
	女	5	10	3	0	4	8
	計	19	17	7	0	6	14
森戸	男	8	11	5	0	4	19
	女	8	8	3	1	4	14
	計	16	19	8	1	8	33
柳町	男	5	9	2	0	0	4
	女	4	4	9	1	1	5
	計	9	13	11	1	1	9
溝端町	男	11	10	2	1	2	9
	女	5	10	10	2	4	7
	計	16	20	12	3	6	16
千代田	男	12	8	4	0	0	3
	女	5	9	6	1	6	3
	計	17	17	10	1	6	6
多和目 西坂戸	男	14	20	9	0	3	11
	女	7	10	15	0	7	9
	計	21	30	24	0	10	20
計	男	72	74	26	1	12	56
	女	37	55	47	5	28	47
	計	109	129	73	6	40	103

ー」は「働くレジャー」と同数に減少している。特に，溝端町，柳町，西坂戸地区の女子においては，「するレジャー」が「見るレジャー」よりも多数を占めている。以上の比較における旧坂戸地区と新坂戸地区の女子の間における相違が，自由時間の長さによるものであるのか，それとも余暇観や職業観を中心とする地域の風土によるものか，あるいはこれらを含む幾つかの要因が一緒に作用して生じたものかは，クロス集計などの結果によって判断されなければならない。そのような集計のためには，今回の調査は標本サイズが不足しているように思われる。働くレジャーという回答が比較的女子に多い（男子12名に対して女子28名）意味は，それが必要にせまられたり目に見えない強制によるものでない場合は，働くことに興味や関心がわき，さらにやりがいも得られるということだろうか。

6. 休日の余暇活動

休日の余暇には平日のそれから幾つかの顕著な変化が認められる。合計で最も多数を占めたのは「するレジャー」であり，次に多い「買物レジャー」の2倍である。「するレジャー」は平日の73名から休日の148名に，「買物レジャー」は平日の6名から73名に，それぞれ大幅に増加したものである。反面，平日において最も多数を占めた「見るレジャー」は5つのカテゴリー中最少（平日の129名から休日の37名）へと減少し，「休むレジャー」にもかなりの減少（平日の109名から休日の65名）が見られる。男女別の比較によってこれらの変化はより明確なものとされる。男子の「するレジャー」への集中（100名）が特に目立っており，それが全体の休日における「するレジャー」が大幅に増加する原因であることがわかる。それに相当する人数だけ「見るレジャー」（平日の74名から休日の24名）と「休むレジャー」（平日の72名から休日の33名）における減少が確認される。他方，女子においては「するレジャー」に関する限り平日と休日との間に全く変化が見られない。女子における最も大きな変化は「買物レジャー」の大幅な増加（平日の5名から休日の47名）であり，それに見合う「見るレジャー」における減少が確認される。女子の「休むレジャー」においては，休日の男子

に見られるような減少は認められない。

地域別の比較においては，旧坂戸地区と新坂戸地区の女子の間に認められた平日の余暇における差異が見られない。全般に地区毎の差は小さなものにすぎない。平日と休日の余暇の比較において認められる最も重要な差は，人々の余暇活動が受動的なもの（「みるレジャー」や「休むレジャー」）から能動的なもの（「するレジャー」や「買物レジャー」）へと変化することである。このことは，自由な時間が増大すれば，人々が自主的な余暇活動をおこなうことが可能であり，それによって余暇における自己実現や生きがいの発見が期待できるということである。この点に関して，勤務時間が短縮されつつあるという現存の傾向や週休2日制の普及は好ましいことである。他方，住宅事情の悪化による通勤時間の増大は，勤労者の間に憂うつな疲れるウィークデーと愉快で活気に満ちたホリデーとに分裂した一週間を生じかねない。すなわち仕事と余暇の分裂が職場と住居の距離の拡大によってもたらされるという懸念がある。

今回の余暇活動に関する調査結果を通して感じたことは，一般に予想される以上に能動的なレジャーが多く認められたということである。しかし回答提出者は比較的余暇に関心の強い人々であると思われること，また回答票の中にかなりの白紙が存在したことなどを考慮すると，多少割り引いて評価されなければならない。ここでは紹介されなかった将来希望する余暇の過ごし方に記された意見などから判断すると，マスコミが報じる年に一度のお祭り騒ぎに似たレジャーとは別のレジャーを人々は求めていることがわかる。それは仕事から解放された時間に自由におこなわれるものではあるが，お祭り騒ぎに見られるように仕事や生活を忘れるためになされるレジャーではない。実際に，お祭り騒ぎに似たレジャーは，勤労が奨励され余暇を楽しむことにある種の後ろめたさがともない，ひそかに余暇を過ごすことを余儀無くされた時代に対する反発として，高度経済成長の助勢を得て流行したものと思われる。新しく静かに滲透しつつあるレジャーは普段の生活の中に仕事との関連で適切に位置づけられ，本人が自分の好きですること，かれ自身の楽しみになる面と，本人の健康の増進，教養の向上，また人間的な成長に役立つ活動であり，さらにそれ自身が対

社会的なサービスともなりうるという面を同時に実現するものである。このようなレジャーの発展に，自主的な選択を欠くことはできないが，気まぐれや単なる思い付きではなくて，計画や準備が必要である。創造的，自己開発的レジャーのためには，多くの場合，そのための仲間やトレーニングが必要である。この点に関して，行政レベルのみならず，人々の間においても施設や物品が優先されている現状には問題があると言わざるをえない。最後に，仕事とレジャ

表8 休日の余暇活動

		休む レジャー	見る レジャー	する レジャー	買物 レジャー	働く レジャー	無回答
本町・仲町	男	5	0	9	3	2	3
	女	1	1	2	4	2	1
	計	6	1	11	7	4	4
日の出町	男	8	1	11	4	4	5
	女	3	2	6	4	7	8
	計	11	3	17	8	11	13
森戸	男	1	7	15	3	4	17
	女	4	1	8	6	4	15
	計	5	8	23	9	8	32
柳町	男	2	1	13	2	0	2
	女	1	1	10	4	1	7
	計	3	2	23	6	1	9
溝端町	男	5	6	15	4	2	3
	女	12	3	8	8	2	5
	計	17	9	23	12	4	8
千代田	男	7	4	11	3	1	1
	女	6	2	7	8	5	2
	計	13	6	17	11	6	3
多和目西坂戸	男	5	5	26	7	4	10
	女	5	3	7	13	9	11
	計	10	8	23	20	13	21
計	男	33	24	100	26	17	41
	女	32	13	48	47	30	49
	計	65	37	148	73	47	90

ーについての調査結果は次回に報告する予定である。

注

1) 埼玉県坂戸市発行「さかど市政だより特集号」，昭和56年9月1日

2) 詳しくは次の論文を参照のこと。田村正夫稿「首都圏の都市成長前線帯における商業地域の形成（Ⅲ）——埼玉県坂戸町「きどうち」の場合——」（『城西経済学会誌』，第10巻，第1号，1974），pp. 49～56

3) Herzberg, Frederick, *Work and the Nature of Man,* Thomas Y. Crowell, Publishers, 1966, pp. 71～91,〔北野利信訳『仕事と人間性』東洋経済新報社，昭和43年，pp. 83～106〕

4) 前掲，「さかど市政だより特集号」

5) 尾高邦雄著『職業の倫理』中央公論社，昭和45年，pp. 273～5